西廂故事の流傳と「傳奇」

――「傳奇」という名稱の變遷をめぐって――

黃　冬柏

目　次

一、問題――王國維の「傳奇四變」說から
二、「傳奇」という名稱の由來――「鶯鶯傳」
三、「傳奇」という名稱の變遷と西廂故事の流傳
（1）「商調蝶戀花」と宋代「傳奇」
（2）『西廂記諸宮調』――「古今傳奇の鼻祖」
（3）『西廂記』雜劇――「傳奇の冠たり」
（4）『西廂記』と明代才子佳人「傳奇」
四、結語

一　問題――王國維の「傳奇四變」說から

「傳奇」とは何を指すのか、この問題については中國文學史上に様々な考え方がある。王國維に據れば、「傳奇」という概念には唐代から明代に至るまで四回の變化があったとする。卽ち王國維は、

傳奇の名は、實に唐に始まる。唐の裴鉶が作る所の『傳奇』六卷は、本より小說家の言にして、此れ傳奇の第一義なり。宋に至れば則ち諸宮調を以て傳奇と爲し、…元人は則ち元雜劇を以て傳奇と爲し、…明人に至れば則ち戲曲の長き者を以て傳奇と爲す。…蓋し傳奇の名は、明に至るまで凡そ四變するなり。[1]

と論じている。近代學問の開祖たる碩學が定義したこの所謂「傳奇四變」說は、中國小說戲曲史研究上に多大な影響を及ぼし、それ以後の文學史・研究著作及び辭書等は、殆どこの說に相從っている。[2] しかし、王國維のこの「傳奇四變」說は、ただ「傳奇」という概念の、時代による表面的な變化を概括するに止まり、そこに內在する變化の要因については、必ずしも十分に指摘していない様に思われる。

時代の推移と共に、「傳奇」は、時に文言小說の代名詞となり、時に戲曲の呼稱となった。では、何故この様に一つの言葉が全く別の作品ジャンルを指すという事が有り得たのであろうか。この問題について考える時、歷代の「傳奇」作品が取り上げた題材に、ある共通性が存在する事に氣付く。それが卽ち西廂故事であり、西廂故事に代表される愛情故事こそが、歷代の「傳奇」に共通して描かれる主たる題材なのである。唐代傳奇小說「鶯鶯傳」から明代傳奇『南西廂』に至るまで、崔鶯鶯と張生の戀愛を題材とするこの西廂故事は、鼓子詞・諸宮調・話本・戲文、或いは戲曲に仕組まれて、正しく「傳奇」という言葉と共に様々な作品に變化しつつ世に送り出されて來たと言えるであろう。

以上の觀點から、本稿では、歷代の西廂故事を題材とした作品を通じて、「傳奇」という名稱の變遷を檢證し、それによって、その言葉の持つ本質的な意味を明らかにすると同時に、西廂故事が中國文學史上に與えた影響についても考察してみたい。

二　「傳奇」という名稱の由來――「鶯鶯傳」

まず、「傳奇」という名稱の由來について確認しておきたい。

「傳奇」という言葉は、從來晩唐の裴鉶の小說集『傳奇』に由來するというのが一般的な見方のようである。[3] しかしそれは果して正しいであろうか。また、唐代小說は宋代に入って初めて「傳奇」と呼ばれ、その名稱は裴鉶『傳奇』の流行に因る、という通說[4]は果して正確であろうか。

裴鉶『傳奇』の原本は既に逸するものの、その主な作品は『太平廣記』の中に保存され、また、周楞伽氏の輯本『裴鉶傳奇』（上海古籍出版社、一九八〇年）に作品三十一篇が收められる。これらの作品を見るに、裴鉶の『傳奇』には、鬼神怪異の物語が最も多く收錄されていたようである。盛・中唐の傳奇小說と比較すれば、裴鉶の作品には劍俠・神怪類が非常に多く、「崑崙奴」「崔煒」「聶隱娘」等はこの類型の代表作として知られている。しかし、愛情故事に取材する作品は極めて少ない。たとえ男女關係について描いていても、そこで强調されるのは人間と鬼神妖怪との出會いであり、男女の愛情そのものに關する描寫は殆ど見られない。例えば、「孫恪」「鄭德璘」「裴航」等の作品では、それぞれ主人公と猴女袁氏・龍女韋氏・神女雲英との不思議な人鬼戀愛が描かれるが、男女の愛情心理についてはあまり語られていない。そこにはむしろ六朝志怪の遺風が强く感じられるのである。これらの作品を果して唐代傳奇小說の代表作であると見なし得るであろうか。ひいては、このような小說を集めた作品集の題名を以って唐代小說を「傳奇」と稱したとする從來の說は、果して信賴するに足るであろうか。

唐代小說の代表作、卽ち通常「傳奇」と呼ばれる作品と言えば、やはり傳奇創作の最盛期と言われる中唐に產み出された單篇作品であり、とりわけ「鶯鶯傳」「李娃傳」「霍小玉傳」等の愛情故事が擧げられるであろう。これらの作品は、從來の超自然的な怪異の要素を切り捨てた人間の「才子佳人小說」であるが、中でも、最も注目されるのは、唐代傳奇小說中の佳篇として中國文學史に多大な影響を及ぼした元稹の「鶯鶯傳」である。この作品が後に千古の名劇『西廂記』の淵源になった事は言うまでもないが、特にこの作品の固有題名として、「傳奇」という名稱が裴鉶より六十年餘りも早く用いられている事實に注意しなければならない。

「鶯鶯傳」は、北宋初の太平興國二年（九七七）、太宗の敕命により、李昉等が編した小說集『太平廣記』卷四八八（雜傳記五）の他、『說郛』（元・陶宗儀、明・陶珽重校）・『虞初志』（明・湯顯祖）・『五朝小說』（明・闕名）・『龍威祕書』（淸・馬俊良）・『唐人說薈』（淸・陳蓮塘）等に收められる。また、『類說』（宋・曾慥）卷二八に據れば、唐・陳翰『異聞集』にも收められていた事が分かる。

その題名については、『太平廣記』を始めとして、『虞初志』及び近人の『唐宋傳奇集』（魯迅、文學古籍刊行社、一九五六年）・『唐人小說』（汪辟疆、文學古籍刊行社、一九五六年）等は皆「鶯鶯傳」に作るが、『重校說郛』『五朝小說』『龍威祕書』『唐人說薈』等は「會眞記」に作る。「會眞記」は文中の「會眞詩」から採ったものであり、會眞とは眞人、

卽ち佳人に會う意である。ただし、この題名は、周知の如く元代以前には全く見られず、明人が勝手に改めたものである。では「鶯鶯傳」という題がこの作品の原題であったかと言うと、それも疑問であろう。というのは、『類說』所收の『異聞集』はこの作を『傳奇』と題しているからである。この問題については、既に卞孝萱・周紹良らが、「鶯鶯傳」という題名は、實は『太平廣記』の編者が勝手に付けたものに過ぎず、作者の元稹自身は本來それを『傳奇』と題していたと指摘する。[8]

唐代小說の保存には、『太平廣記』が重要な役割を果したが、一方で晩唐に完成した陳翰の『異聞集』の存在も見逃すことはできない。何故ならば、魯迅の指摘する樣に、「『太平廣記』所收の唐人傳奇文は、多く『異聞集』に本づく」（『唐宋傳奇集』卷末「稗邊小綴」）からである。『異聞集』自體は既に散逸して傳わらないが、『類說』『太平廣記』等の叢書に據って、そこに收められていた作品のうち四十一篇を今日確認することができる。次に擧げる二十五篇目は『類說』卷二八所收の『異聞集』に收められる唐代小說の題名である。（なお、『太平廣記』に收錄される同作の題名及び出典を竝記する。）

『異聞集』題名：	『太平廣記』題名（卷數・出典）：
(1)「神告錄」	「丹邱子」（二九七、「神告錄」）
(2)「上淸傳」	「上淸」（二七五、『異聞集』）
(3)「神異記」	無
(4)「鏡龍記」	「李守泰」（二三一、『異聞錄』）
(5)「古鏡記」	「王度」（二三〇、『異聞錄』）
(6)「韋仙翁」	「韋仙翁」（三七、『異聞集』）
(7)「枕中記」	「呂翁」（八二、『異聞錄』）
(8)「僕僕先生」	「僕僕先生」（二二、『異聞集』）
(9)「柳氏述」	「柳氏傳」（四八五）
(10)「汧國夫人傳」	「李娃傳」（四八四、『異聞集』）
(11)「洞庭靈姻」	「柳毅」（四一九、『異聞錄』）
(12)「霍小玉傳」	「霍小玉傳」（四八七）
(13)「華嶽靈姻」	無
(14)「感異記」	「沈警」（三二六、『異聞錄』）
(15)「離魂記」	「王宙」（二五八、「離魂記」）
(16)「傳奇」	「鶯鶯傳」（四八八）
(17)「相如琴挑」	無
(18)「南柯太守傳」	「淳于棼」（四七五、『異聞錄』）
(19)「三女仙精」	「姚氏三子」（六五、「神仙感遇傳」）
(20)「謝小娥」	「謝小娥」（四九一）
(21)「冥音錄」	「冥音錄」（四八九）
(22)「碧玉槲葉」	「李章武傳」（三四〇）
(23)「周秦行紀」	「周秦行紀」（四八九）
(24)「湘中怨」	「太學鄭生」（二九八、『異聞集』）
(25)「任氏傳」	「任氏」（四五二）

このうち、『異聞集』と『太平廣記』とが同じ題名であるのは僅か六篇〔(6)(8)(12)(20)(21)(23)〕であり、その他については『太平廣記』は全て主人公の名を採って題名とする。例えば、「古鏡記」は「王度」、「枕中記」は「呂翁」、「離魂記」は「王宙」となっている。これは『太平廣記』の編者が唐代小說の題名を改める時に採用した一つの編集原則であったようである。してみれば、「鶯鶯傳」という題名もまた、恐らく原題名ではなく、『太平廣記』に始まるものであろう。

ところで、元稹の小説（表記の都合上、今これを「鶯鶯傳」と呼ぶ）は、『異聞集』と『太平廣記』のほか、北宋・趙令畤（字德麟、一〇五一～一一三四）の「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」[6]（以下、「商調蝶戀花詞」と略す）中にもかなり詳しく引用されている。趙令時は、「鶯鶯傳」及び元稹本人について深く考證した上で、「辨『傳奇』鶯鶯事」「微之年譜」及び「商調蝶戀花」を撰述した。「商調蝶戀花」の冒頭に、作者は元稹の小説を『傳奇』と記している。

夫れ『傳奇』なる者は、唐元微之の述ぶる所なり。[7]…

この他の二編の文章に於いて、「鶯鶯傳」は、十四箇所に亘って『傳奇』という題名で表記されている。[8]また同じく宋人傅幹は、『注坡詞』中の二箇所で元稹の小説を引用し、その題名を『傳奇』とする。[9]更に、元代に於いても、陶宗儀・元好問等といった文人達がいずれも「鶯鶯傳」を『傳奇』と呼んでいたのである。[10]これらの記述からすれば、「鶯鶯傳」の原題は『傳奇』であった可能性が極めて高いのである。

そしてこの事は、唐代文言小説が「傳奇」と總稱される事にも深く關係する。「鶯鶯傳」は才子佳人小説の誕生を告げる重要な作品であると同時に、唐代小説が到達し得た最高の境地であった。つまり、唐代傳奇小説全體及び後世の文學に多大な影響を與え得る巨大な作品であったと言えるのである。一方、王夢鷗氏の考證に據れば、『異聞集』は裴鉶の『傳奇』よりも二十餘年早く成立したと思われる。[11]とすれば、裴鉶は『異聞集』の影響を受けた上で、元稹の小説『傳奇』の篇名を採用し、自分の小説集の書名にしたのではあるまいか。この様に見てくると、元稹の名作『傳奇』は、西廂故事の成立のみならず、「傳奇」という言葉の淵源としても重要な役割を果したと考えられるのである。

三　「傳奇」という名稱の變遷と西廂故事の流傳

「傳奇」という名稱は、以上に述べた如く元稹の小説名からスタートしたが、後に時代の流れに伴い、その内包するものが次第に變化していき、幾つかの文藝ジャンルを指すことになった。以下には、「傳奇」という名稱の指す作品ジャンルの變遷と、西廂故事の流傳との繋りについて檢討しながら、「傳奇四變」の現象に内在する要因について探ってみたい。なお、以後は前段の結論を踏まえ、元稹の小説の題名を『傳奇』と表記する。

(1)「商調蝶戀花」と宋代「傳奇」

唐代に於ける傳奇小説の流行に續いて、宋代には俗文學が勃興した。この時期に於いてまず注目すべきは、先程言及した趙令時の「商調蝶戀花」という講唱文藝作品である。趙令時は、『傳奇』の主人公張生が卽ち元稹（字微之）本人であると捉え、自分の創作の正式名稱も張生、崔鶯鶯ではなく、「元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞」とする。

ところで、趙令時は何故『傳奇』に對してこの様に强烈な興味を抱いたのだろうか。彼が「商調蝶戀花」を作る目的は何だったのか。「商調蝶戀花」の冒頭に、彼は當時の『傳奇』の流行についてこう記載している。

…今に至るまで士大夫は幽玄を極談し、奇を訪ね異を述ぶるに、此れを擧げて以て美談と爲さざるは無し。倡優女子に至りては、皆能く大略を調說す。惜しいかな之を比ぶるに音律を以てせず、故に之を聲樂に播し、之を管絃に形す能はず。好事の君子、飲を

極めて歡を肆にするの際、一たび其の說を聽かんと願欲ふも、或は其の末を擧げて其の本を忘れ、或は其の略を紀して其の篇を終ふるに及ばず。此れ吾曹の共に恨む所の者なり。[12]

この様に、趙令時は當時民間に流行していたのが『傳奇』の大略であって、その故事の全部ではなかった事を指摘し、その原因を、『傳奇』に樂曲がついていなかった點に求めている。一方、『傳奇』の內容そのものについても彼には不滿があった。そこで趙令時は、當時民間に流行した鼓子詞というジャンルを採用し、『傳奇』に基づきながらも獨自の見解によって「商調蝶戀花」という優れた講唱文藝作品を生み出したのである。

この作品は、十二節から構成され、それぞれの節は語りと歌の二つの部分に分れる。まず散文部分である語りを見ると、冒頭の第一節と結末の第十二節を除いた、第二節から第十一節は、全て『傳奇』を引用したものである。一方、韻文部分である歌は、卽ち作者が自分で作った「蝶戀花詞」十二首であり、全て語りの後に歌われている。

ところで、趙令時は『傳奇』の基本プロットを保存しながらも、原作中の張生の「忍情の辯」と元稹の「補過の辭」とが宣揚する「尤物論」に對しては「煩褻」として斥ける。その上で、この觀點に關わる結尾の部分を全て削り去ると同時に、張生の薄情さと殘酷さを嚴しく非難して、遺棄された鶯鶯に深い同情を寄せながら、「蝶戀花詞」十二首を詠んだのである。いま紙幅の都合上、十二首のうち第二首を擧げてみる。

錦額重簾深幾許　　錦額　重簾　深きこと幾許ぞ
繡履彎彎　　繡履　彎彎として
未省離朱戶　　未だ朱戶を離るるを省みず
强出嬌羞都不語　　强ひて嬌羞を出だすも　都て語らず
絳綃頻掩酥胸素　　絳綃もて頻りに掩ふ　酥胸の素きを
黛淺愁深妝淡注　　黛淺く　愁深く　妝淡く注ぎ
怨絕情凝　　怨絕へ　情凝りて
不肯聊回顧　　聊かも回顧するを肯ぜず
媚臉未勻新淚汚　　媚臉　未だ勻はざるに　新淚汚す
梅英猶帶春朝露　　梅英　猶ほ帶ぶ　春朝の露

この第二首詞では「嬌羞」「怨絕」の氣質と「愁深」「情凝」の性格を併せ持つ崔鶯鶯が描かれる。これは、散文中に引用した『傳奇』中の彼女のイメージとも一致する。鶯鶯は「深沈矜恃、善良鍾情」の特徵を備えると同時に、「孤僻怯弱」の一面も有していた。正にこの性格の二重性が、「媚臉未だ勻はざるに新淚汚す」という情況を生み出し、彼女は、最後に棄てられる運命に直面しても、ただ我慢して耐えるしかないことになるのである。

かくして、西廂故事は初めて樂曲に支えられることとなり、また故事全體が一つの完成した作品中に收められたわけである。樂曲がついた事で、主として士大夫階級に愛好されていた西廂故事が、庶民の娛樂の場所にまで進出することとなった。現存する文獻に基づけば、趙令時こそが、この様に唐代傳奇小說と宋代講唱文藝とを直接結び付けた最初の人であった。そしてその事が、「傳奇」という言葉がその示す作品ジャンルを次々に變えてゆく端緖となったと言える。その結果、吳梅及び王國維が、

傳奇の名は、金源に昉ると雖も、宋趙德麟の「蝶戀花詞」を顧みるに、七言の韻語を以て、徵之の原文に加入し、而して節を按じて彈唱すれば、則ち已に傳奇の串演の法を啓けり。惟だその名は

乃ち元に成るのみ。[13]

傳はる者は惟だ趙德麟の「商調蝶戀花」のみ。「會眞記」の事を述ぶること凡そ十闋、原文を曲前に竝置し、又一闋を以て一闋を起こし之を結ぶ。後世戲曲の格律に視ぶれば具體にして微なるに幾し。[14]

と評する様に、趙令時のこの作品は、後世の戲曲に大きな影響を及ぼすことになったのである。

一方、「傳奇」という名稱は、前代の著名な詩人元稹の名聲に乘り、且つ『傳奇』が內容的にも人々に好まれるものであった所から、宋代以降民間に廣く流布するに至ったと考えられる。しかも、この頃より、「傳奇」という言葉は單に「鶯鶯の物語」を指すだけに止まらない意味を持ち始める。灌園耐得翁・吳自牧らの記錄に據れば、「煙粉・靈怪・傳奇…」[15]と竝記される様に、「傳奇」は、宋代では盛り場で人氣を博した語り物「說話」のうち、戀愛をテーマにしたものである事が分るし、羅燁『醉翁談錄』の「傳奇」という項目には、「鶯鶯傳」のほか、十八種の男女の情愛・悲戀を題材にした小說の題目が記錄されている。[16]また、明の胡應麟『少室山房筆叢』卷二九「九流諸論」の小說分類にも、同じ様に「傳奇」に含まれる作品として「飛燕」「太眞」「崔鶯」「霍玉」等の、いずれも愛情に關わる作品が擧げられている。[17]こういった事から考えると、宋代に於いては所謂「傳奇」は、廣く男女の戀愛を題材とした物語を指したのではあるまいか。そしてそこには元稹の小說『傳奇』の影響が根底にあったと思われる。卽ち人々に愛された張生と鶯鶯の戀愛物語の題名が『傳奇』であった事が、戀愛を扱った作品イコール「傳奇」という意識を生み出し、結果として、男女の戀愛を描く作品を全て「傳奇」と呼ぶに至ったと考えられるのである。

(2)『西廂記諸宮調』――「古今傳奇の鼻祖」

宋・金・元代に於いては、商品經濟の繁榮と都市文明の勃興に伴い、通俗文學（特に講唱文藝）は大いに發展していった。その中でも、「瓦子」（「瓦肆」或は「瓦舍」とも）や、「勾欄」等といった民間の娛樂場に於いて繰り廣げられた講唱文藝が盛んになっていった。そこでは、様々なジャンルの演藝が相互に影響し合うこととなり、人氣のある故事があれば、同じ題材を雜劇・說話・院本・諸宮調などといった異なる藝術形式によって上演する事も行われたのである。

中でも、「傳奇」（卽ち愛情故事）の人氣は、「靈怪」「神仙」等を題材とする作品と比べて格段に高く、數多くの作品が作られた。『醉翁談錄』甲集卷一「小說開闢」には、小說演目を「靈怪」「煙粉」「傳奇」「公案」「朴刀」「桿棒」「妖術」「神仙」の八種類に分け、このうち「傳奇」は「靈怪」「煙粉」の後に竝べられているが、作品數としては、「傳奇」に收錄するものが最も多く、しかもそれらは全て愛情故事となっている。また、同じく宋・皇都風月主人の『綠窗新話』でも、「傳奇」類に收錄する「張公子遇崔鶯鶯」等の話本の數は、その他の七種類の總數を遙かに上回っている。

更に、その當時の講唱文藝の世界では、「傳奇」がよく歌われたという。卽ち、宋・周密の『武林舊事』卷六は、南宋末杭州の「諸色伎藝人」の中で、「諸宮調傳奇」の演唱者として「高郎婦・黃淑卿・王雙蓮・袁太道」の四人の名を記し、[18]一方、『金史』卷一二九「佞幸傳」は、「傳奇小說」の說唱者として「張仲軻」という藝人の名を擧げている。[19]こういった記載から、宋・金代に於いて、藝人達が「傳奇」の

故事を諸宮調・説話等の講唱藝能作品として盛んに語っていた様子を伺い知ることができる。

ところで、諸宮調というジャンルは、宋・金・元代の間に盛行した講唱文藝の一種であり、同じ宮調、卽ち同一音階の調子に屬する歌曲を二つ以上組み合わせて一套とし、そうした套を何十となく積み重ねつつ、首尾一貫した物語を語ってゆく長編の語り物である。諸宮調の「且つ語り且つ歌う」というスタイルは、鼓子詞などの體裁と同じだが、曲調の豐富さとスケールの雄大さに於いては、當時の他の講唱文藝のジャンルを遙かに凌ぎ、より戲曲の構造に近づいたものであると言える。この諸宮調が北宋の藝人孔三傳によって創始され、かつて廣く流行した事は、宋人筆記の隨處に記錄されている。孟元老の『東京夢華錄』卷五「京瓦伎藝」は、當時の汴京の瓦肆で上演された演目の一つを敍して、

崇・觀以來、在京の瓦肆伎藝…孔三傳の『耍秀才諸宮調』[20]。

という。また、南宋の杭州で、灌園耐得翁の『都城紀勝』には、

諸宮調は本京師の孔三傳の編撰にして、傳奇・靈怪を曲に入れて說唱す[21]。

とあり、吳自牧の『夢粱錄』卷二十「妓樂」は、

諸宮調を說唱するは、昨に汴京に孔三傳有り、傳奇・靈怪を編成し曲に入れて說唱す[22]。

と記する。更に北方の金でもこの演藝が行なわれた事は、元の陶宗儀『輟耕錄』卷二五「院本名目」に、

唐に傳奇有り、宋に戲曲・唱渾・詞說有り、金に院本・雜劇・諸宮調有り[23]。

とあることに據って知られる。しかし、諸宮調の作品そのものは現在殆ど殘されておらず、現存するのは、董解元の『西廂記諸宮調』[24]（以下、『董西廂』と略稱）全本のほか、一九〇八年にロシアのカズロフ探險隊が、甘肅省の黑水城遺跡で發見した金代無名氏の『劉知遠諸宮調』と、明の『雍熙樂府』等に見える元代王伯成の『天寶遺事諸宮調』の殘本のみである。この中、『董西廂』は、西廂故事文學史を考える上でも、また「傳奇」という名稱の變遷を探る上でも、恰好の貴重な資料である。この點について、以下具體的に分析してみたい。

まず、形式から見てみると、『董西廂』は、一四の宮調、一九三の套數を用い、琵琶と箏で伴奏しながら、首尾一貫した西廂故事という長編の物語を語り、且つ唱ってゆく作品である。諸宮調以前の講唱文藝である「大曲」「鼓子詞」及び「唱賺」等は、そこで用いる宮調の數を一つに限定しており、二つ以上の宮調を用いて自由自在に一つの故事を講唱する形を取ったのは諸宮調が初めてであった。この事は、明淸傳奇がその一齣中の宮調を一つに限定しない體裁を取るのと類似する。

「曲調」について見れば、諸宮調のそれは唐宋大曲・唐宋詞調・流行歌曲及び作者創作の四種類から仕組まれる。『董西廂』の場合は、【伊州滾】【迎仙客】【柘枝令】【大聖樂】等の曲が唐宋大曲からの引用である。唐宋詞調としては【醉落魄】【滿江紅】【虞美人】【水龍吟】等がよく見られる。また【降黃龍】【整乾坤】【喬捉蛇】【柳靑娘】等の當時流行した歌曲も使われている。それ以外に出所不明の曲名も多く使用されるが、これは董解元が自ら創作したものと考えられる。董解元については、元末鍾嗣成の『錄鬼簿』の冒頭に、

董解元、金の章宗の時の人。其の創始せるを以て、故に諸を首に列す[25]。

と記錄されるほか、明・朱權の『太和正音譜』「古今羣英樂府格勢」の筆頭にも、

董解元、金に仕ふ、始めて北曲を製す。[26]

という記述がある。卽ち董解元は北曲の創始者に位置付けられる人物と言える。

この董解元は、『傳奇』の內容を大幅に擴張し、込み入った筋と豐富な人物像を描いて、長編の諸宮調作品を創り出した。『董西廂』冒頭の【風吹荷葉】【尾】及び【太平賺】等の曲からは、その當時の愛情故事の流行した情況等を窺うことができる。

【風吹荷葉】……話兒不提朴刀桿棒、長槍大馬。

…朴刀桿棒・長槍大馬の故事を提起しない。

【尾】曲兒甜、腔兒雅、裁剪就雪月風花、唱一本兒倚翠偸期話。

曲は甘く、調子は雅やか、雪月風花の色戀ばなしを剪り取って、一つの戀愛物語を唱おう。

【太平賺】……俺平生情性好疎狂、疎狂的情性難拘束。一回家想麼、詩魔多愛選多情曲。

…俺は生來氣性がとても粗暴で、粗暴な氣性を押え難い。一たび創作にふければ、詩魔が多情の曲を作りたがる。

（凌景埏校注『董解元西廂記』卷一）

ここでは、「朴刀桿棒、長槍大馬」といった立ち回りを主とする物語と比べて、「倚翠偸期の話」や「多情の曲」（卽ち愛情故事）のほうが人氣が高いと唱う。また、【柘枝令】の曲[27]に唱われる『崔韜逢雌虎』『鄭子遇妖狐』『井底引銀瓶』『雙女奪夫』『離魂倩女』『謁漿崔護』『雙漸豫章城』『柳毅傳書』という八つの諸宮調作品名が全て愛情故事である事にも注目すべきであろう。當時如何に愛情故事の人氣が高かったかが分る。そしてその中でも、特に人氣を博したのは、やはり西廂故事であった。

ところで、民間に流行した講唱文藝作品は、庶民階層の思想意識の影響を直接受けて創作されたと考えられる。一方西廂故事の悲劇的結末が、中國通俗文學の通念として許容されにくい事については、既に魯迅が次の樣に述べている。

これは中國人の心理が非常に團圓を好むために、必ずこの樣になるのである。[28]

西廂故事は典型的な才子佳人式の故事であり、男女主人公とも才と貌を兼ね備え、詩の贈答によって心を通わせるという庶民階層に最も好まれる種類のストーリーである。從って、この故事を好む人々にとっては、鶯鶯と張生というこの理想のカップルの悲劇的な別れが非常に殘念であった。つまり本來知識人のために書かれた『傳奇』では、宋代以後の庶民の共感を呼び起こす事は不可能だったのである。董解元は、その當時聽衆もしくは觀客の嗜好の影響を受け、而も樣々なジャンルの先行作品（例えば、鼓子詞「商調蝶戀花」・戲文「張珙西廂記」・話本「張公子遇崔鶯鶯」等）を踏まえた上で、西廂故事の悲劇的結末を大團圓式へと改變し、最も人々を滿足させる作品を創り出したのである。西廂故事を扱った多くの作品に見られる、所謂「西廂式」という大團圓パターンは、實は『董西廂』に於いて始めて成立したと言える。この作品のみが完全な形で現在に傳わるのは、恐らく以上に述べたことに起因すると考えられる。また、中國戲曲史上最も著名な作品である王實甫の『西廂記』雜劇が、『董西廂』から誕生したことは言うまでもないが、その文學的價値に於いて『董西廂』は却って高いと評價される。例えば、『少室山房筆叢』卷四一「莊嶽委談」に、

西廂記は唐人の鶯鶯傳に出づと雖も、實は金の董解元に本づく。董曲は今尚ほ世に行はれ、精工巧麗、備さに才情を極む。而も字字本色、言言古意、當に是れ古今傳奇の鼻祖なるべし。金人一代の文獻此に盡きたり。[29]

と述べる通り、『董西廂』は正に「承前啓後」の役割を果たした、「古今傳奇」の代表的な作品なのである。因みに、王國維は『曲錄』卷四の中で、この『董西廂』を傳奇作品の一部として、『西廂記』雜劇等の前に置いている。[30] この事からも、『董西廂』が、西廂故事の變遷、及び歷代の「傳奇」作品の中に於いて極めて重要な位置を占める事が分かるであろう。

(3)『西廂記』雜劇――「傳奇の冠たり」

凡そ一代に一代の文學有り、楚の騷、漢の賦、六代の駢語、唐の詩、宋の詞、元の曲、皆所謂一代の文學なり。[31]

という様に、元の時代に於ける文學史上最も重要な文學ジャンルは戲曲であり、即ち雜劇である。その元代に於いて雜劇を「傳奇」と呼んだ事は、元人の著作から分る。例えば『錄鬼簿』には四五〇餘りの雜劇の名前が記錄されているが、皆全て「傳奇」と稱し、そこに「雜劇」の二字は全く見當たらない。關漢卿・王實甫等の著名な元雜劇作者の名前とその作品は、「有所編傳奇行於世者」の題目の下に示される。[32] また、周德清の『中原音韻』や楊維禎の『元宮詞』の中でも、同じ様に『剛王莽傳奇』『周公攝政傳奇』等という様に雜劇作品を「傳奇」と呼んでいるのである。[33]

ところで、ここで問題となるのは、『錄鬼簿』等の中に見られた「傳奇」と呼ばれる雜劇作品が、全て愛情故事を描いたものであるとは限らないことである。前述の如く、宋代講唱文學に於いては、「傳奇」とは、元稹の同名小說を始めとする男女の戀愛物語を題材にしたものを指した。その當時、語り物であろうと、諸宮調であろうと、愛情故事を扱った作品であれば全て「傳奇」と稱したが、その他の「神仙」「靈怪」等を題材とする作品はその中に含まれなかったのである。しかしその後、愛情故事の人氣の高まりと共に、「傳奇」作品が數多く作られたことによって、その他の題材を扱った作品を壓倒するに至った。その結果、「傳奇」という言葉が次第に講唱文藝全體を指す名稱に變化すると同時に、その題材も愛情故事から擴大し、遂に「神怪」「劍俠」「倫理」「公案」等の物語を含むことになったと思われる。

こういった現象は特に元代に入って以後に顯著である。元代の作品と言われる戲文『宦門子弟錯立身』[34]には、

【那吒令】這一本傳奇、是『周孛太尉』。這一本傳奇、是『崔護覓水』。這一本傳奇、是『秋胡戲妻』。這一本是『關大王獨赴單刀會』。這一本是『馬踐楊妃』。

這の一本の傳奇は、『周孛太尉』なり。這の一本の傳奇は、『崔護覓水』なり。這の一本の傳奇は、『秋胡戲妻』なり。這の一本は『關大王獨赴單刀會』なり。這の一本は『馬踐楊妃』なり。

(錢南揚校注『宦門子弟錯立身』第五出)

という様に、五つの戲文作品が歌われるが、そのうち『周孛太尉』と『關大王獨赴單刀會』は愛情故事ではないにもかかわらず、「傳奇」と稱されている。その後、「傳奇」は雜劇を指す言葉に變化したが、その時にはもはや扱う題材を愛情故事に限定する意識は全くなくなっていたのである。

本來、「傳奇」という言葉は、宋代の說話人の意識の中でも、狹義

と廣義の二つの意味があったようである。「傳奇」卽ち愛情故事という狹い意味に對して、廣義の「傳奇」は、全ての種類の小說故事を指した。例えば、『醉翁談錄』甲集卷一「小說開闢」には、「鶯鶯傳」等の十八種の男女の情愛・悲戀を題材にした小說を「傳奇」と指したが、一方、その篇末の詩に、

小說紛紛として皆これ有り、須く實學に憑るべくして是れ根基なり。開天闢地より經史に通じ、博古明今にして傳奇を歷す。[35]

とあって、ここに言う「傳奇」とは「經史」の對として用いられており、古今全ての物語を包括すると思われる。

そもそも內容がどうであろうと、「奇」を傳えれば全て「傳奇」なのであるから、「傳奇」という言葉はあらゆる種類の故事を包括することができるわけである。この樣な「傳奇」という言葉が本來持っている意味の幅廣さは、遂には宋代以來の、語り物の題材を分類した名稱として限定した用法を次第に變化させていくことになった。卽ち「傳奇」は、題材類別（戀愛をテーマにしたもの）の名稱から文學體裁（諸宮調・南戲・雜劇など）の呼稱へと移行していったのである。

元代に於ける「傳奇」、卽ち元雜劇の中に、唐代傳奇小說に基づいて改編したものは四十餘作を確認することができるが[36]、男女の戀愛を題材としたものがその多くを占めている。中でも代表的な作品と言えば、やはり愛情故事を描いた名作――王實甫の『西廂記』（以下、『王西廂』と略す）が擧げられるであろう。しかし、この『王西廂』は、「古今傳奇の鼻祖」と評される『董西廂』が無ければ到底成立し得なかったと言える。何故ならば、その故事內容と表現形式の兩面に於いて、『王西廂』は多く『董西廂』を踏襲すると考えられるからである。

具體的に比較して見ると、『董西廂』は、前述の通り、一四の宮調、一九三の套數を用いて、首尾一貫した西廂故事という長編の物語を語り、且つ唱ってゆく作品である。『王西廂』の場合は、五本二十一折で構成されるが、一折一套を原則とするから、【仙呂調】（五套）・【商調】（一套）・【雙調】（三套）・【中呂調】（四套）・【正宮】（二套）・【越調】（六套）等六つの宮調、二十一の套數を用い、西廂故事を演じることになる。しかも、この六つの宮調は全て『董西廂』の一四の宮調の中に含まれていたものである。また、『董西廂』は、全篇を通じてただ一人が語りながら唱っていたものであり、これを演じた講唱者には男も女もいたと考えられる。こういった特徵は、元の雜劇の一人獨唱及び旦本・末本の區別を有する體制と完全に一致する。『王西廂』の五本二十一折の中で、第一本「張君瑞鬧道場雜劇」は末（張生）の主唱であり、第二本「崔鶯鶯夜聽琴雜劇」と第三本「張君瑞害相思雜劇」は旦の獨唱である。ただし、第四本「草橋店夢鶯鶯雜劇」と第五本「張君瑞慶團圓雜劇」は一人獨唱のスタイルを採らず、複數の角色が唱うという元雜劇としては例外的な形式を採っている。これは西廂故事の豐富な內容を表現する必要から變化したものと考えられよう。更に、曲調についても、『董西廂』に使われる【尾】を除いた一三九種の曲調のうち、實に四九種が北曲（元の雜劇）へ受け繼がれるが、その中十三種が『王西廂』に受け繼がれている。

ところが、『王西廂』と『董西廂』との間に、若干の重要な相違が存在することは、見逃されるべきではない。まず、『董西廂』は最も戲曲の形に近づいたものではあったが、あくまで講唱文藝の一作品にすぎなかった。これに對して、『王西廂』は第一人稱で西廂故事を演じてゆく、所謂代言體の戲曲作品なのである。そして內容面から見ても、『王西廂』は大團圓の結末を受け繼いだものの、更に男女の戀愛・

婚姻の自由を提唱し、「願普天下有情的都成了眷屬」という反封建の理想を打出した。また、何といっても、その文采の優秀さと描寫の巧みさによって、『王西廂』は『董西廂』を凌駕する。『少室山房筆叢』巻四一「莊嶽委談」に、

今王實甫の『西廂記』は傳奇の冠たり。[37]

と評される様に、『王西廂』は、元稹の「傳奇」に始まる西廂故事文學の一つの集大成と言え、また中國戲曲史上初の才子佳人型長編戲曲として、後世の戲曲、特に明清傳奇へ直接的な影響を及ぼすのである。

(4)『西廂記』と明代才子佳人「傳奇」

明代に至って南曲が發達して以後、戲曲の中でも長編のものを「傳奇」と稱して、雜劇と區別するようになった。しかし、何故南曲中の長編作品のみを「傳奇」と呼び、北雜劇についてはその呼稱を用いないのであろうか。實は、それこそ『王西廂』の影響を受けた結果だと思われるのである。

明の徐子室・鈕少雅の『九宮正始』[38]や王驥德の『曲律』巻四「雜論第三九」[39]中では、『王西廂』は「荊劉拜殺」の「四大南戲」及び『琵琶記』『牡丹亭』等の南曲の代表作品と竝んで「傳奇」と呼ばれている。一般に宋元南戲は明清傳奇の前身であると言われるが、明清傳奇の成立に於いては、『王西廂』の影響も見落とせないのである。

まず、形式から見ると、『王西廂』が元雜劇の代表作品と言いながらも、實際には、元雜劇の特徴である「一本四折」・「一人獨唱」等の體制とあまり一致していない事は周知の通りである。その五本二十一折の長編體制と、主役である末（張生）と旦（鶯鶯）が交互に演唱し合い、脇役の紅娘・惠明も合間に歌うなどという形式になっている事は、『王西廂』の成立後七百餘年に亘る謎となっている。また、明・臧晉叔の編輯した『元曲選』をはじめ、如何なる元雜劇の叢書或いは選集にも、『王西廂』は收められなかった。この事は、決して臧晉叔らが『王西廂』の價値と影響を無視していたことを示すものではなく、やはりその體裁が他の雜劇と大いに異なるためであったと思われる。しかし、『王西廂』のこれらの特徴は、正に明清傳奇の形式とよく似ている。「傳奇」と呼ばれる南曲作品は皆三十齣ないし五十齣に至る長編であり、且つ登場人物が皆或いは對唱し、或いは合唱し、元雜劇の一人獨唱の單調形式を破っているのである。

一方、內容の面から見ても、『王西廂』は、最初の才子佳人戲曲として、明代傳奇中の生・旦戲へ直接に甚大な影響を與えたと考えられる。「傳奇十部九相思」と言われた明代傳奇は、才子佳人型の配偶姻緣や夫婦の悲歡離合が主流であった。萬曆年間以後、傳奇は最盛期を迎え、多數の優れた作品が作り出されたが、それらの作品の殆どは才子佳人の戀愛物語であり、才子が幾多の曲折を經つつ、最終的に必ず科擧合格による出世と、佳人との團圓を得るというパターンとなっていたのである。

ところで、明・毛晉の編輯した『六十種曲』は南曲の全集である。その中に收められる作品は、『王西廂』と崔時佩・李日華の『南西廂記』を含めて、全て長編作品であり、しかもそこには才子佳人型の故事を題材とするものが多く見られ、なお且つ題名は全て『〇〇記』となっている。この事は、明の祁彪佳が、『王西廂』等の北曲を、『〇〇記』という題名であることから、南曲と區別なく扱っていることに通じる。[40]また、史上最大規模と言われる戲曲總集『古本戲曲叢刊』では、三種類の明刊本『王西廂』は九七種の南戲・傳奇とともにその

『初集』に收められ、『第四集』(元雜劇)の中には收められていない。こういった事からも、主編者である鄭振鐸が『六十種曲』の編集方針を完全に受け繼いでいたことを窺うことができるのである。從って、王季烈の『螾廬曲談』に、

王實甫の『西廂』は、才華富贍にして、北曲の巨製なり。其れ四本を疊ねて以て一部と爲すは、已に傳奇の先聲を開き、且つ其の詞藻も、亦た都て南詞に近きの處有り。[41]

と指摘する樣に、『王西廂』の形式及び內容が明代傳奇全體に大きな影響を及ぼしたことは疑い得ないであろう。

明代に於いては、西廂故事の流行と印刷業の發達に伴い、『王西廂』は樣々な形で刊行されたが、特に南曲傳奇の勃興に應じて、南曲の形式に基づいて改編したものが多く作られた。『王西廂』に關しては明代だけでも六十餘種の版本が上梓されているが、これらは、あくまで北曲の雜劇であり、南曲の戲文とは異なる。そこで、西廂故事を南曲の演出に適應させるために、曲牌まで作り變えた崔時佩・李日華及び陸采の『南西廂記』が作られた。更に、『王西廂』の模擬作或いは『王西廂』の影響を受けて作られた南曲作品が大量に出現することになった。こういった狀況から見ると、『王西廂』は、明代の西廂故事の流行だけではなく、南曲傳奇の發展に於いても、甚大な影響を與えたと言えよう。

四　結語

「傳奇」とは、元來文字通り「奇を傳える」、つまりこの世の中で怪異な事を語り傳えるという意味だったが、時代の推移と共に、その內包するものが次第に變化していった。以上述べて來た如く、「傳奇」という言葉は唐・元稹の同名小說に始まり、その「奇」とは、人間世界の奇遇・奇緣、特に男女の情愛と戀の曲折を指した。『傳奇』と同時期に作られた詩「琵琶歌」の中で、元稹が「奇事」「奇處」「奇絕」「賞奇」「藝奇」といった言葉と「人間」「塵事」とを一緒に使っている事も注目に値する。[42]卽ち、「傳奇」は本來怪異を記す謂であったが、元稹・白居易が活躍した中唐に入ると、傳奇小說の最盛期を迎えると同時に、次第に超自然的要素を含まない人間世界の現實物語を指す言葉に變化し、とりわけ人間の愛情世界を綴ることが大きな特色となっていったのである。[43]

宋・金代に至ると、鶯鶯の物語『傳奇』は、文人小說から民間文藝の世界へと進出することになる。最初「傳奇」は、語り物「說話」のうち、元稹の小說を始めとする男女の情愛をテーマにした物語を指したが、その後、それらの愛情故事の人氣が特に高まり、數多くの作品が作られたことによって、その他の「神仙」「靈怪」等を扱った作品を壓倒し、結果として、語り物であろうと、諸宮調であろうと、愛情故事を扱った作品であれば全て「傳奇」と呼ぶに至ったのである。そして丁度その頃、「古今傳奇の鼻祖」としての『董西廂』が登場し、「傳奇」という概念の變化と西廂故事の演變に多大な影響を及ぼした。元代に入ると、『王西廂』の誕生に伴い、「傳奇」は元雜劇を指すと同時に、その題材も愛情故事に限定されなくなって來た。明の時代、長編の南曲を「傳奇」と呼ぶ樣になったことにもまた、『王西廂』の流行が色濃く影を落していると思われる。胡應麟が、

傳奇の名は、何れの代より起るかを知らず、…或いは中の事蹟相類するを以て、後人取りて戲劇の張本と爲し、因って展轉して此の稱を爲すや知るべからず。[44]

と指摘する様に、「傳奇」の示すジャンルが次々に變化した背景には、その內容が深く關係している。「傳奇」と呼ばれる作品について、

傳奇の作は、大都故事を演述して、才子佳人に取材す。[45]

と述べる如く、「傳奇」とは結局大部分が才子佳人の戀愛物語であった。そして今「傳奇」という言葉の變遷を詳細に檢討する時、その根底には、終始一貫して歷代の西廂故事を題材とした作品の流行があったと見て取れるのである。

以上、「傳奇」という言葉の變遷と西廂故事の流傳との繫がりを檢證して來たが、これによって、愛情物語が歷代の人々にとって如何に魅力的なものであったかが、一つの例證を通して實證されたと思われる。愛情は人間の美しい感情であり、また人が生きる際の巨大な原動力でもある。愛情というテーマは文學に於いて、普遍的かつ恒久的なテーマである。才子佳人故事の生命力は正しく愛情という美しい感情をテーマとした點に存し、それによって人々を魅了して來た。西廂故事の流傳の歩みは、正に中國愛情文學の發展過程そのものとも言い得よう。元稹の小說『傳奇』は才子佳人小說の祖型を成す作品である。『董西廂』は、西廂故事の悲劇的結末を大團圓へと改變し、これによって、最も庶民の嗜好と合致する作品として、長い間流行することとなった。そして『王西廂』は、中國文學の中で最も典型的な愛情劇として、後世の文學、特に愛情を題材にした作品へ多大な影響を及ぼすに至ったのである。

また、「傳奇」という言葉の變遷と西廂故事の流傳からは、中國俗文學發展史の一つの典型的な軌跡を窺うことができる。俗文學作品の場合、聽衆もしくは觀客を樂しませる娛樂性・通俗性・好奇性を追求することは當然のことであった。特に宋代以後、俗文學が次第に盛んになるにつれて、西廂故事のあり方と「傳奇」という呼稱の示す內容もまた、共に庶民の嗜好によって變化していく。しかし、それらは、その形式（鼓子詞・諸宮調・話本・戲曲）及びプロットを時代に應じて變化させながらも、その主題は常に一貫して、才子佳人の愛情であった。その所以は正しく、愛情というテーマが、いつの世も變わらぬ普遍的な主題であるからに他ならないのである。

そこで最後に、以上の觀點を踏まえ、次の表をまとめてみた。「傳奇」の指すジャンルの變化は、この表にまとめた樣に、正に西廂故事の流傳と共に進んで來たと考えることができるであろう。

西廂故事の流傳と「傳奇」名稱の變遷との關係表

「傳奇」名稱の變遷：唐代小說……宋代話本……宋金諸宮調……宋元南戲……元代雜劇……明代長編戲曲

西廂故事の流傳：『傳奇』……『張公子遇崔鶯鶯』……『董西廂』……『張珙西廂記』（佚）……『王西廂』……『南西廂記』
（『鶯鶯傳』）　『宿香亭張浩遇鶯鶯』　『崔鶯鶯西廂記』（佚）『鶯鶯牡丹記』（佚）　『續西廂昇仙記』
『鶯鶯傳』（佚）　『錦西廂』（佚）

注

(1) 傳奇之名、實始於唐。唐裴鉶所作『傳奇』六卷、本小說家言、此傳奇之第一義也。至宋則以諸宮調爲傳奇、……元人則以元雜劇爲傳奇、……至明人則以戲曲之長者爲傳奇、……蓋傳奇之名、至明凡四變也。(『宋元戲曲考』十六「餘論」)

(2) 『辭海』(上海辭書出版社、一九七九年)、『漢語大詞典』(漢語大辭典出版社、一九九三年)及び『大漢和辭典』(大修館書店、一九五五年)等の辭典の「傳奇」についての解說は王國維の說とほぼ同樣である。また吳新雷氏は「論宋元南戲與明淸傳奇的界說」(『中國戲曲史論』所收、江蘇敎育出版社、一九九六年)中で「傳奇四變」說に基づいて「傳奇七變」說を提出された。

(3) 例えば、「裴鉶『傳奇』三卷。」(『新唐書』卷五九・『宋史』卷二六〇)、「范文正公爲『岳陽樓記』、用對語說時景、世以爲奇。尹師魯讀之、曰:『『傳奇』體爾!』『傳奇』、唐裴鉶所著小說也。」(宋・陳師道『後山詩話』)、「唐所謂「傳奇」、自是小說書名、裴鉶所撰。」(明・胡應麟『少室山房筆叢』卷四一「莊嶽委談」)、「『傳奇』者、裴鉶著小說、多奇異而可傳示、故號「傳奇」。」(淸・梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』)等の記錄がある。

(4) 周楞伽氏『裴鉶傳奇』「前言」に「是宋代因裴鉶『傳奇』的流行、才把它概括了一切唐人小說、給唐人所創的這一文學樣式定下傳奇的名稱、似乎較爲可信。」と。

(5) 卞孝萱氏「『鶯鶯傳』的原標題及寫作年代」(『揚州師院學報』、一九七八年第三期)と同氏『元稹年譜』(齊魯書社、一九八〇年)及び周紹良氏「『傳奇』箋證稿」(『中國古典文學研究論叢』所收、吉林人民出版社、一九八〇年)參照。

(6) 「商調蝶戀花」については、拙稿「宋代西廂故事と蘇軾—趙令畤「商調蝶戀花」をめぐって—」(『中國文學論集』第二十四號、一九九五年十二月)參照。

(7) 夫『傳奇』者、唐元微之所述也。……

(8) 趙令畤『侯鯖錄』卷五所收の「辨『傳奇』鶯鶯事」に十箇所、及び「微之年譜」に四箇所の合わせて十四箇所に『傳奇』という題名が見える。

(9) 『傳奇』、崔氏與張籍詩:「自從別後減容光、……」(見龍榆生『東坡樂府箋』卷三「定風波・重陽括杜牧之詩」傅注)『傳奇』、張生與崔氏諧遇、……(同右卷三「浣溪紗・詠橘」傅注)

(10) 『傳奇』、崔氏鶯鶯婢曰紅娘。(陶宗儀『輟耕錄』卷一四「婦女曰娘」)按唐元微之『傳奇』鶯鶯事、以爲張生寓蒲之普救寺、……『傳奇』言生年二十二。(同右卷一七「崔麗人」)「骨化形銷、丹誠不泯、因風委露、猶記淸塵。」是崔娘書詞、見元相國『傳奇』。(元好問『遺山樂府』卷中「江海引序」)

(11) 王夢鷗氏『唐代小說研究』二「陳翰異聞集校補釋」(藝文印書館、民國六十二年)。

(12) ……至今士大夫極談幽玄、訪奇述異、無不擧此以爲美談。至於倡優女子、皆能調說大略。惜乎不比之以音律、故不能播之聲樂、形之管絃。好事君子、極飮肆歡之際、愿欲一聽其說、或擧其末而忘其本、或紀其略而不及終其篇、此吾曹之所共恨者也。

(13) 傳奇之名、雖昉於金源、顧宋趙德麟「蝶戀花詞」、以七言韻語、加入微之原文而按節彈唱、則已啓傳奇串演之法、惟其名乃成於元耳。(吳梅『顧曲塵談』第二章「製曲」)

(14) 傳者惟趙德麟之「商調蝶戀花」、述「會眞記」事凡十闋、竝置原文於曲前、又以一闋起一闋結之。視後世戲曲之格律幾於具體而微。(王國維『戲曲考源』)

(15) 說話有四家、一者「小說」、謂之「銀字兒」、如煙粉・靈怪・傳奇。(灌園耐得翁『都城紀勝』「瓦舍衆伎」)且小說名「銀字兒」、如煙粉・靈

怪・傳奇・公案・朴刀・桿棒・發發蹤參之事。（吳自牧『夢粱錄』卷二十「小說講經史」）

(16) 論「鶯鶯傳」・「愛愛詞」・「張康題壁」……此乃爲之傳奇。（『醉翁談錄』甲集卷一「小說開闢」）

(17) 小說家一類、又自分數種。……一曰傳奇。飛燕・太眞・崔鶯・霍玉之類是也。

(18) 諸宮調傳奇、有高郎婦・黃淑卿・王雙蓮・袁太道。

(19) 張仲軻、幼名牛兒、市井無賴、說傳奇小說、雜以俳優詼諧語爲業。

(20) 崇・觀以來、在京瓦肆伎藝……孔三傳『耍秀才諸宮調』。

(21) 諸宮調本京師孔三傳編撰、傳奇・靈怪、入曲說唱。

(22) 說唱諸宮調、昨汴京有孔三傳編成傳奇・靈怪、入曲說唱。

(23) 唐有傳奇、宋有戲曲・唱渾・詞說、金有院本・雜劇・諸宮調。

(24) 『董西廂』については、金文京氏等共著『董解元西廂記諸宮調研究』（汲古書院、平成十年二月）に本文の校訂・注釋及び日本語譯のほか、作品の形式と內容をめぐっての詳しい解說がある。また、拙稿「西廂故事の戲曲化について――金・董解元『西廂記諸宮調』を中心として――」（『中國文學論集』第二十五號、一九九五年十二月）參照。

(25) 董解元、金章宗時人。以其創始、故列諸首。

(26) 董解元、仕於金、始製北曲。

(27) 【柘枝令】也不是崔韜逢雌虎、也不是鄭子遇妖狐、也不是井底引銀瓶、也不是雙女奪夫。也不是離魂倩女、也不是謁漿崔護、也不是雙漸豫章城、也不是柳毅傳書。

(28) 這因爲中國人的心理、是很喜歡團圓的、所以必至如此。（『中國小說的歷史變遷』第三講「唐之傳奇文」）

(29) 西廂記雖出唐人鶯鶯傳、實本金董解元。董曲今尙行世、精工巧麗、備極才情。而字字本色、言言古意、當是古今傳奇鼻祖。金人一代文獻盡此矣。

(30) 傳奇部（上）：『西廂』一本、金董解元撰。『西廂記』一本、元王實甫撰、關漢卿續。『天寶遺事』一本、元王伯成撰。

(31) 凡一代有一代之文學、楚之騷、漢之賦、六代之駢語、唐之詩、宋之詞、元之曲、皆所謂一代之文學。（王國維『宋元戲曲考』「自序」）

(32) 『錄鬼簿』卷上に「前輩已死名公才人、有所編傳奇行於世者」

(33) 齊微韻「壓」字、前輩『剛王莽傳奇』與支思韻通押。……前輩『周公攝政傳奇』太平令云：口來豁開兩腮」。（『中原音韻』「正語作詞起例」）『尸諫靈公』演傳奇、一朝傳到九重知。奉宣齊與中書省、諸路都敎唱此詞。（『元宮詞』）

(34) 朱恒夫氏の「戲文『宦門子弟錯立身』成立於元代」（『文學遺產』、一九八六年第四期）に據れば、この作品は元代に作られたものである。

(35) 小說紛紛皆有之、須憑實學是根基。開天闢地通經史、博古明今歷傳奇。

(36) 程國斌氏「唐傳奇與元雜劇相關作品的比較研究」（『學術研究』、一九九七年第二期）參照。

(37) 今王實甫『西廂記』爲傳奇冠。

(38) 詞曲始於大元、茲選俱集大歷至正間諸名人所著傳奇數套。……『西廂記』・元傳奇。『蔡伯喈』・元傳奇。『殺狗記』・元傳奇。『拜月亭』・元傳奇。『劉智遠』・元傳奇。『王十朋』・元傳奇……。

(39) 嘗戲以傳奇配部色、則『西廂』如正旦、聲色俱絕、不可思議。『琵琶』如正生、或峨冠博帶、或倣巾敗衫、俱嘖嘖動人。『拜月』如小丑、……『還魂』二夢如新出小旦、……『荊釵』『破窯』等如淨。

(40) 品中皆南詞、而『西廂』『西遊』『凌雲』三北曲何以入品？蓋以全記故也。全記皆入品、無論南北也。（『遠山堂曲品』「曲品凡例」）

(41) 王實甫『西廂』、才華富贍、北曲巨製、其疊四本以爲一部、已開傳奇先聲、且其詞藻、亦都有近於南詞之處。

(42) 『全唐詩』卷四二一。また、『元稹集』（冀勤點校、中華書局、一九八二年）卷二六所收。

(43) 近藤春雄氏『唐代小說の研究』(笠間書院、昭和五三年)・戸倉英美氏「傳奇小說とは何か」(『しにか』一九九七年十月號、大修館書店)等參照。

(44) 傳奇之名、不知起自何代、……或以中事續相類、後人取爲戲劇張本、因展轉爲此稱不可知？(『少室山房筆叢』卷四一「莊嶽委談」)

(45) 傳奇之作、大都演述故事、取材於才子佳人。(明・傳眞社『鳳儀閣傳奇』跋)

〔付記〕

本稿は、大阪市立大學で開催された一九九七年度日本中國學會第四十九回大會に於けるロ頭發表をもとにまとめたものである。